

# 奏伴

曙光詩社  
詩集

第三輯

(春の卷)

- 川路柳虹
- 前田夕暮
- 與謝野寛
- 社友詩歌
- 豊嶋與志雄
- 小山内薫



EDMUND DULAC





ばんそう

片身

(春の巻)

川路柳虹編

3



奏 伴  
集詩社詩光曙  
輯 三 第



錢拾四金價定  
錢四金稅郵  
京 東  
社 詩 光 曙



# 奏 伴

輯 三 第

社 詩 光 曙  
集 詩

(春の巻)

- 川路柳虹
- 前田夕暮
- 與謝野寛
- 社友詩歌
- 豊嶋與志雄
- 小山内薫



EDMUND DULAC

春の巻  
川路柳虹編

奏 伴

集 詩 社 詩 光 曙

輯 三 第



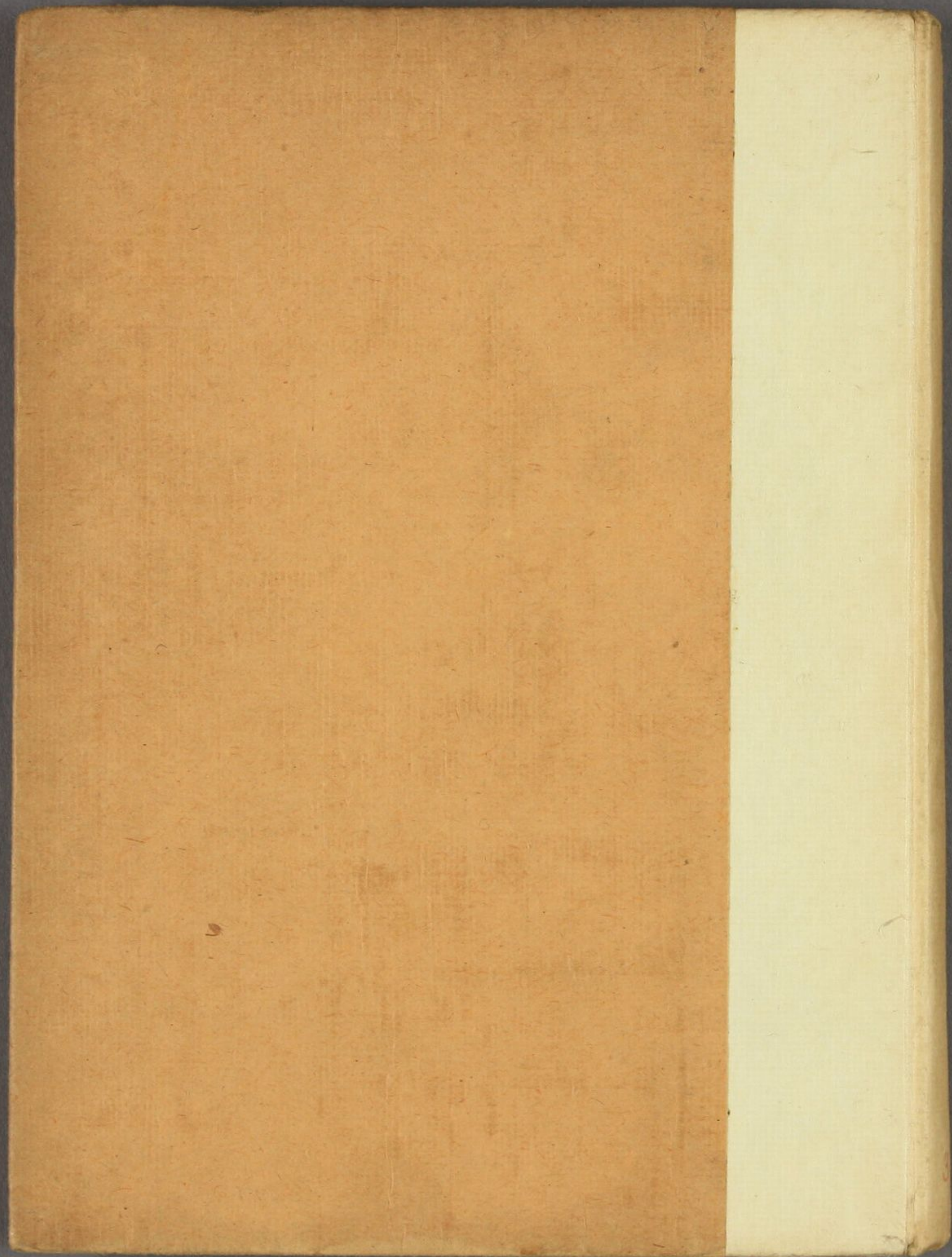
錢 拾 四 金 價 定  
錢 四 金 稅 郵

京 東

社 詩 光 曙









ば

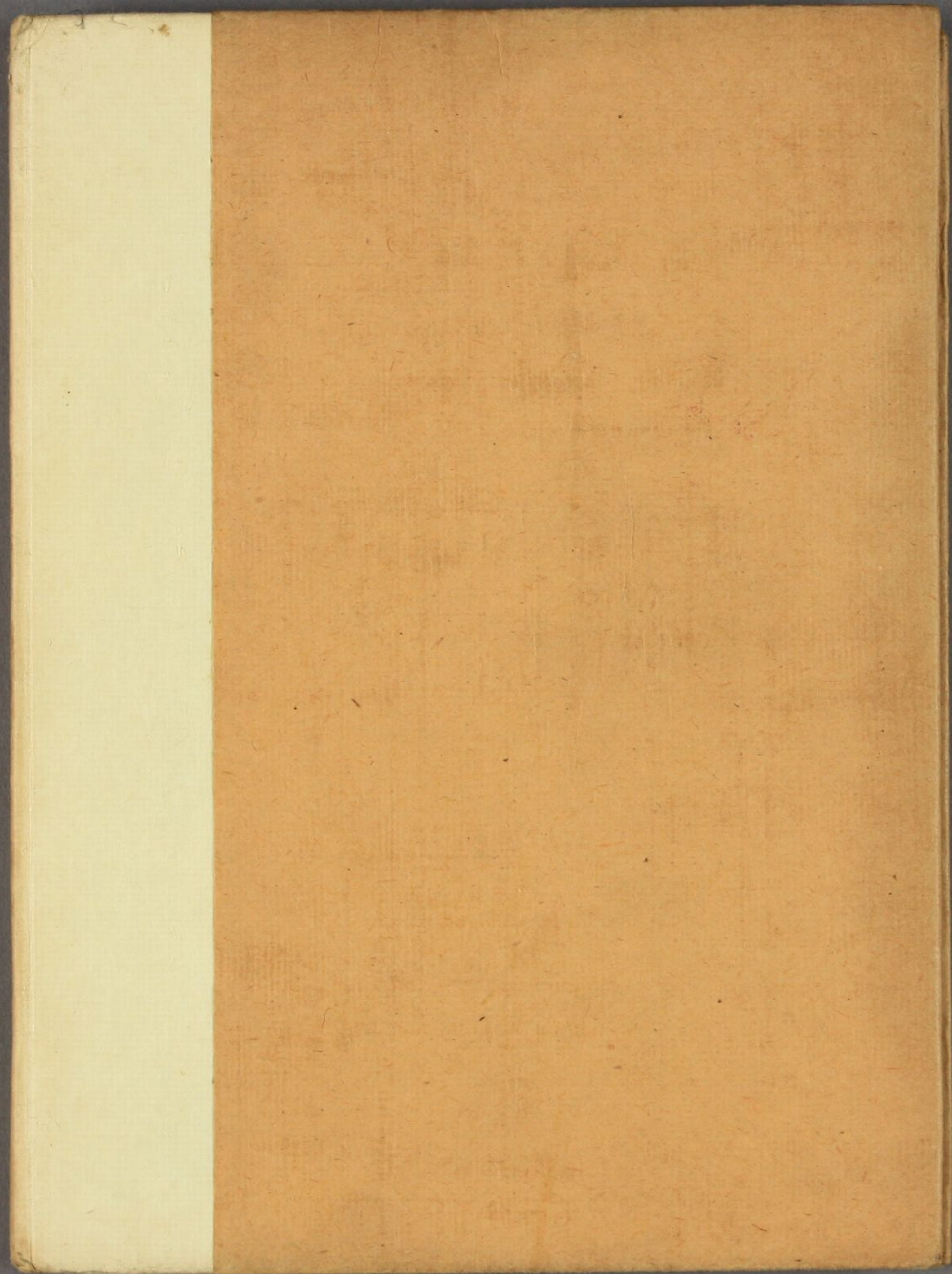
ん

そ

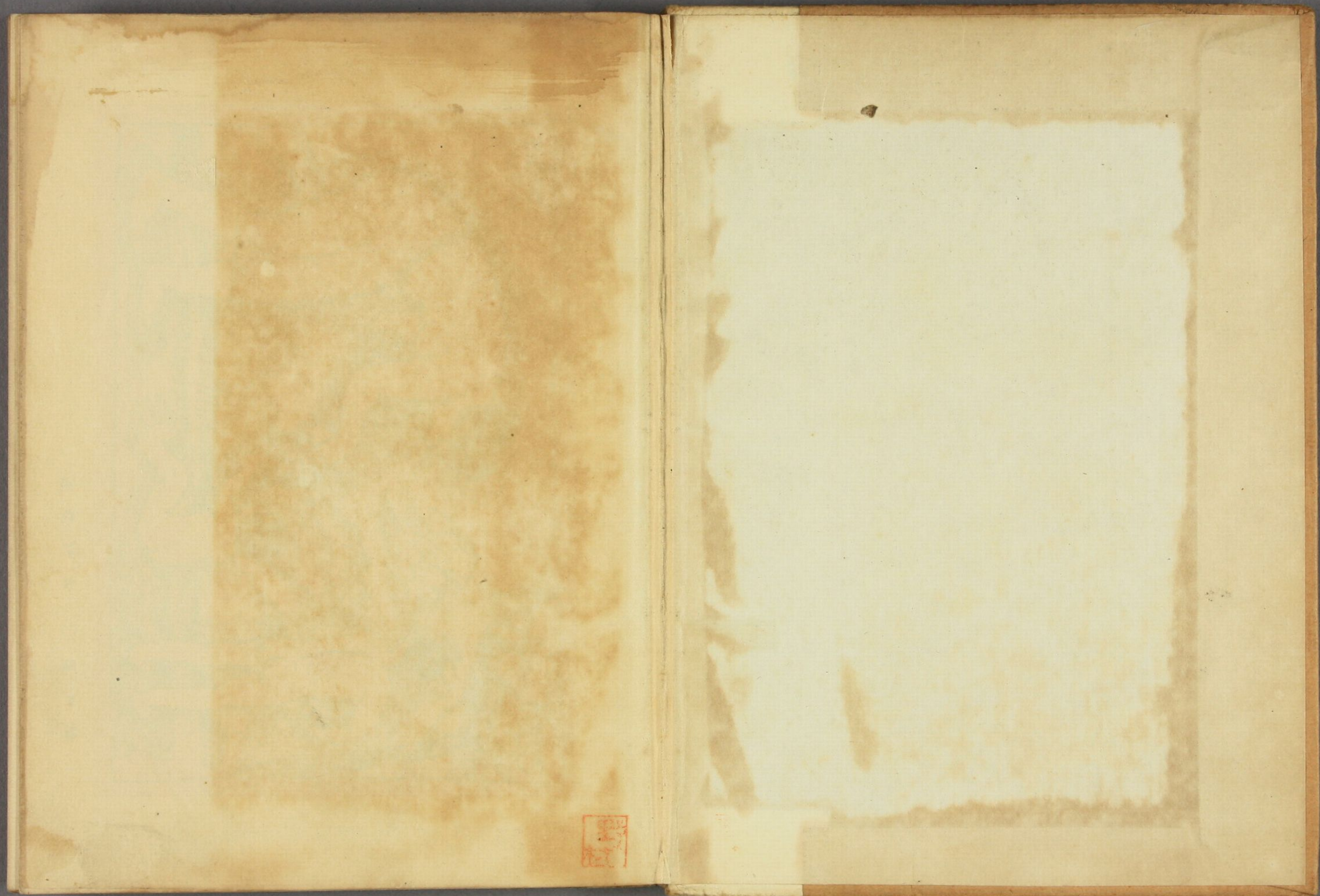
う

3













母の愛 □ 大野隆徳





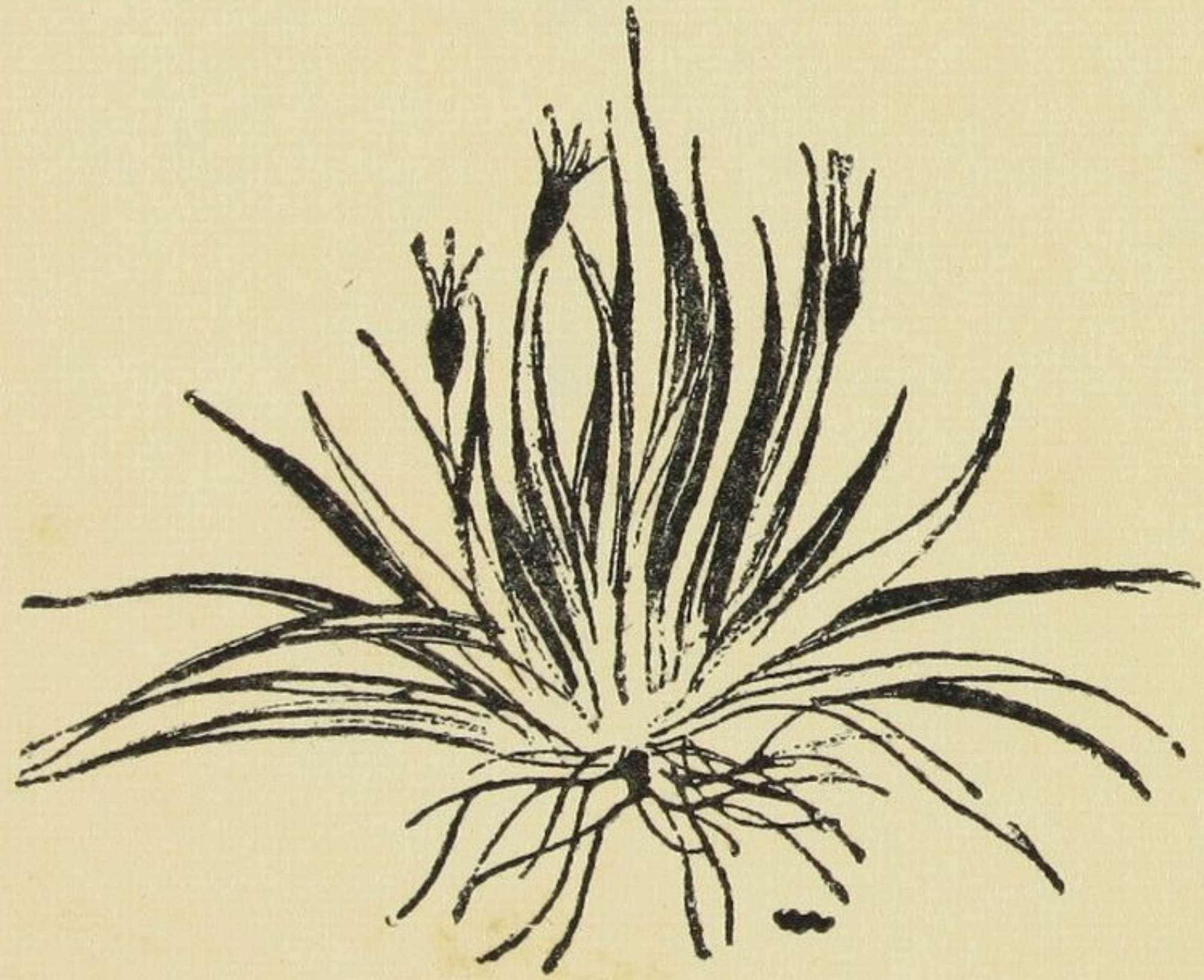
曙光詩社詩集

伴 奏

第三輯

春の巻

(大正六年四月)



東京曙光詩社發兌



伴

奏

第三輯  
(春の巻)



伴奏 第三輯(春の巻) 目次

エミール・ヴェルハアレン……………ルミ・ド・グルモン(二)  
 力行(ヴェルハアレン)……………川路柳虹譯(三)  
 座談の中から……………與謝野 寛(四)  
 私の詩……………小山内 薫(六)  
 旅人の言……………豊島與志雄(三)  
 曙覽を憶ふ……………前田 夕暮(七)  
 沈丁花……………廣川 菽泉(四)  
 朝の路と荷馬車……………福田 正夫(五)  
 夜の暴風……………前田 春聲(四)  
 雲雀の唄……………平戸 廉吉(五)

Ahnungdes Schrankende……………M. Katsumoto (五)  
 聖 夜……………山崎 泰雄(五)  
 冬……………朱 耀 翰(六)  
 朱塗の空……………正井 謙二(五)  
 夕……………倉石 ちか良(七)  
 ふけゆく夜……………藤井 月泉(六)  
 雪よ雪よ……………大澤 歌朗(七)  
 二つの胸……………三幡よし夫(七)  
 よろこび……………藤井五郎雄(七)  
 四月の夜……………浅田真佐子(七)  
 夜の足なみ……………廣田英之助(八)  
 降る雪……………小室 楚 囚(八)



地上秘歌……………清水浮鳥(一九)

冬……………窪田照子(九二)

春……………伊東慶信(九三)

雨の歌……………大西花郊(九七)

春鳥集……………(九八)

淺田眞佐子 渡井春雄 廣田英之助

大澤忠一郎 石渡白映 三幡よし夫

滑川義彦 藤井五郎雄 伊東青暮

倉石ちか良 大島武男 正井謙二

大澤歌朗 西川二紫星 高橋典一郎

尚 伊東慶信 林早枝

笹井柳朗 勝本正晃 高橋一峯

大西花郊 松本福督(二六)

髪……………松本福督(二六)

北の港……………秋月露村(二三)

孤獨の面……………澤ゆき子(二三)

丘の月……………川路せい子(二六)

至高の律(ヴェルハアレン)……………會野簡治譯(二九)

食後の卓……………柳虹生(二四)

□

□

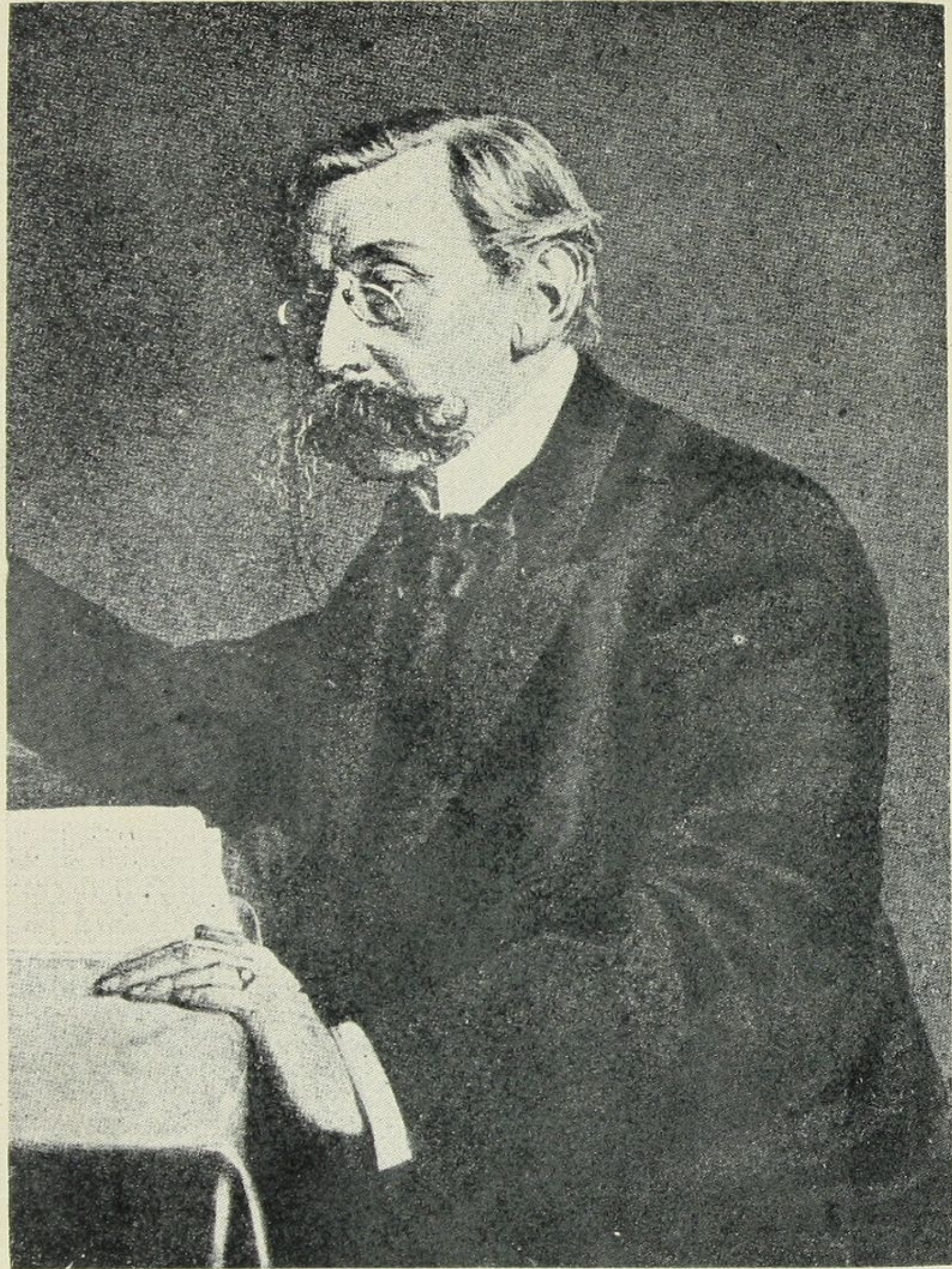
□

扉繪 春の草……………廣川松五郎

寫真版 ヴェルハアレン肖像……………

挿繪 母の愛……………大野隆徳





M. ÉMILE VERHAEREN

尊きこの世紀の詩人ヴェルハアレンに

R · K

血塗れの白耳義、痛ましき世紀の上に

おんみは至上の詩をば植ゑつけたり。

またと咲かざる花をば、おゝ詩人よ、

君は弗羅曼の野邊より世界に贖けせり。



エミール・ヴェルハアレン

ルミ・ド・グルモン

力行

(ヴェルハアレン)

川路柳虹譯

座談の中から

與謝野寛

私の詩

小山内薫

旅人の言

豊島與志雄

曙覽を憶ふ

前田夕暮



## エミール・ヴェルハアレン

## ルミド・グルモン

今の多くの詩人、宛ら川邊に凭れ咲く水仙の如き今の詩人たちの中にあつてヴェルハアレン氏は何ら世の賞嘆を享けたために自らを諛るが如き事なき詩人である。彼は粗野で獐猛で武骨である。二十年來といふもの彼は魔訶不可思議の用具ものぐを鍛冶するため山上の洞窟に住み、火に焼けて赤き鐵を打ち、その焔の反映で輝き光輝の背光を得た。かくてそこに再現され得たものは

心の鋼鐵はがねを磨く如く

一大鐵槌をもて打ち

忍従と沈黙の巨大なる鐵てつりの如き

ものを鍊え上げたのである

もし人が彼の立脚地を探索しそれに就いて訊問するならば彼は鐵砧の上に幾度も練磨された言葉の比喩を以て答へるであらう。そしてその結論として重い一大鐵槌を與へるであらう。

けれども彼は彼の鐵工所に於て勞作したのではなかつた。彼は田野に赴いて勞作したのである。その頭と素裸な腕と、そして法羅曼フロマンの野とは未だ一度も民衆に向つて語られなかつたそれらの秘密を彼に語つたのである。彼は奇蹟の如くしてしかも何ら不可思議でない事物を見た、彼の前には不可思議の實在が過ぎた。その實在は世の人が理智を捨てよ求め得る實在で彼一人の目には明らかに見得る實在である。彼は師走の嵐に遭遇した。

## 師走の荒々しき嵐



君は逢ひしや、八巻の

道路につゞく四辻を吹く嵐を

彼は幾度も「死」を見た。「恐怖」を見た。「沈黙」を――

夜のかたへに擴がりゆく

「沈黙」を見た。

ヴェルハアレン氏の詩の中で特異な言葉は幻覺的 *hallucinées* といふ言葉である。この言葉は彼のどの頁にも見らるゝ言葉である。その完全な結晶ともいふべき「幻覺の曠野」 *Les Campagnes hallucinées* にはその言葉が絶えず付き纏つてゐる。それを呪ふものゝ言葉は可能ではなかつた。何となればその言葉が彼の自然でありヴェルハアレン氏自らの本質であるからである。即ちヴェルハアレン氏

5  
 躬らが幻覺の詩人であるからである。テーマは言つた事がある、『感覺とは眞實の幻覺である』と。然し眞實はいづこに始まつていづこに終るものであらう。誰がそれを限界するであらう。詩人といふものは心理上の分度めどがわかるものではない。また眞實にも虚偽にもその幻覺を限度することに就いては虚心坦懐である。彼にとつてそれらの感覺は凡て眞實である。よしそのものが過激で且つ強烈であるとしても、また朴訥な言語を以て語られてあるとも――ヴェルハアレン氏に依つて書かれた文字は最壯麗なものである。藝術に於ける美といふものは相關的な結果でありかつそのものが多様な要素の混構に依つて得られた結果である。而してまた屢々豫期以上のものである。これら種々の要素の中で唯一個のものが永遠不變のものである。そのものはそれらのあらゆる組織の中に再現すべきものである。これ即ち新意ヌーヴオーテである。一個の藝術の創作は新意あるも



のでなくてはならない。そしてそのものが前人未發の感覺を與ふことに於て吾人に何ら踴疑する處なくその新意を感得さすべきものでなくてはならぬ。

若しそのものが何ら新意を與へなかつたならば、人が新意を判斷するに苦しむやうなものであるならば、その創作は偽惡と侮蔑より以外にはないのである。何となれば「美」以上に永久的に必要なものは存在しないからである。ヴェルハアレン氏の中に於て美は正に新意と力との所業である。かの地熱の如き憤激の暴力を以て出現し來つた『觸角をもつ都市』以來、この詩人は勢力あり且つ何人もその存在と大詩人たるの榮冠とを拒否するものなきに至つた。然しながら彼は二十年來鍛へてきた魔訶不可思議の樂器を尙ほ未だ完成してゐないのかとも思はれる。なほ全く彼の言語を自由自在に操縦してゐないのかとも思はれる。彼の創作は定つてゐない。時に彼はその最も美しい頁を不釣合な形容詞で重く

さしてゐる。彼の最も立派な詩は嘗て人が散文と呼んでゐるものよなかに絡まれてゐる。が、その印象は、カブよい、壯麗な印象はちやんと残つてゐる。そこが即ち、大詩人の大詩人たる處であらう。「寺院」(Cathedrales)といふ詩の斷章をきよ玉へ。

おい、この會衆、この會衆よ、

海瀟の如くも押し寄せ來る

哀憐よ、また苦悶よ。

聖壇と絹の花飾りと

街衢へとさし出したる

玻璃と水晶の屋根、



讃頌の歌團は聲高らかに  
ゴチツクの十字架をば進むる。

それらは凡て潔き日曜日こんじきの金色の中に置かれたり、  
諸聖降誕の祝祭いはひ、基督降誕の祝祭いはひ、復活祭と清純の聖靈降誕祭と、  
それらは凡て金色燦爛たるうち、香爐の煙るなか、  
また大風琴オルガンの嵐と羽搏つ祭典まつりの中に置かれたり。

緋に燃ゆる圓柱と朱あじに輝く穹窿と  
げにそれらは一つの靈たましひなり、日輪に輝き、  
古代の裝飾と絶對の教權との  
古き秘密を生かすべき一つの靈なり。

さはれその讃頌の歌をば  
純朴にして原始的なる交誦をば打ち消すものあり  
銀の鼎と青銅の祭壇の上に  
燃え立つ香の喪章ぞ烙印をなす。  
數多ある色窓硝子、その不動の法王と共に  
その殉教者と英傑と共に  
基督の前に跪く世紀の偉人等  
宛ら街を過ぎゆく重々しき列車の響のごとくに揺れうごく。

ヴェルハアレン氏はヴィクトル・ユーゴの嗣子のやうに見える。殊にその



最初の創作に於て然りである。否最も熱情的な自由な詩に向つて推移して行つた時に於てさへ然りである。彼は今尙ほ浪漫的なものを有つてゐる。彼は彼の天稟の才にそれを享けてゐる。この事は彼のあらゆる壯大とあらゆる雄辯とを保有してゐるものである。それを證明するためにはこゝに往時を喚び起すべき四つの章節を擧げやう。

さばれ今——漂泊へる夢遊病者の如き生は

朝ごとにまた物語めく夕ごとに過ぎゆく

神の正義は青きカナアンの地に向つて

薄明の深みに金の道を曳きたり。

さばれ今——巨大なる生は、激發する生は

荒々しく駿馬の立駈に懸りぬ。

突如その踵に偉大なる光明をもて

巨大の空間に勢ひかに跳り立ちぬ。

今——燃え立つ生は、喚び起す生は

天上の白き十字架、地獄の赤き十字架、

鐵の鎧の輝きにいづれも進む、

血にそみて、勝利の空のかなたへと。

今——泡立ち沈む生は

過去と死とは、罪劫と警鐘の一撃に



彼らの中に戦へり。追放を命ずる者と暗殺者と、  
狂暴にして壯嚴なる死を以て生はそらの上に超越す。

この詩は「幻の村々」Villages Illusoiresから抜いたものである。これは殆んど  
獨特な、類韻を用ひて且つ氣息の進むまよの韻律リトムに従つて句切りをした自由詩  
でかいてある、然しヴェルハアレン氏は自由詩の大家であると共にまた浪漫的な  
詩の大家である。建設を知つて破壊するなく自由で且つその思想は恐ろしき飛  
躍をなし、想像は酔ひ、幻影と未來の夢幻とをその詩に所有してゐるのである。

川路 柳 虹 譯

## 力 行

エミール・ヴェルハアレン

言葉より脱のがれよ、書籍より脱れよ、  
そはたゞ意志を鈍らすものよみ、  
吾は覓もむ、わが自尊の心の奥に  
吾を救ひ吾を放つものよ力を。

生は彼處かしこに、狂暴にして豊饒なる、  
狂へる跳躍に世界の大道を嚙むべき  
生は彼處かしこにある、争亂と塵埃のなか、



一群の猛者はその蠶たてがみにうち懸けられ、  
跨る馬の上、その躍動に身を起す。

不思議なる中にも不思議に

彼らは登りゆく、雨と風との中を衝いて

大膽に一心不亂に登りゆく。

力行！

けにそは悲壯のものゝ中に装へるを知る、

嵐の空の上

血塗れの腕かひなと憤激の叫喚さけびのなかにあるを知れり。

索繩を投げてはかへし測量そくじょうかる

海のごとくに

重く、氣深く力行を夢みんより、

吾は花と彫像の魅まよはしき静けさをもて

そを身につけん希望のぞみをもつ。

吾はいづこにもそを喚び起すを知る、

悲みの這ふところ、狂亂の爪立つまだつところ、

吾はなほそを求むるを知れり、

夜の明くるまで、曉の來るまで。



その時はや既に彼らは衝立つ、  
 自尊の心に優しく爽やかなる孤獨の身をもて。

危機と静寂とにある生、

争鬭と和解とにある生、

生に、死に、

苛酷峻烈の生、力に充ち溢れたる生、

あと、生は彼處極北の雪と氷の下にあり。

坦道を更に新に掘りかへす

彼處にあり、信仰の中また威望を憎むものゝ中、

赤く燃え立つ人間の熱誠の中にあり。

海洋の怒濤のさ中、その恐怖のさ中にある。

岸に立ち、しかも恐怖を探らぬものゝ如く、

けに生は森の中、歌の如くも花咲く季節にあり。

山を飾り亞弗利加の島々を飾り合ふ

緑の木々の中にある。生は力の増す處、

身振り手振りにうち連れて永遠の中にあり、

天才立つて世の讒誣を噛みつくし、

行爲を創造し、進化をさし示し、

突如として湧き起る偉人の力を用意する彼處に

あり。



言葉より脱れよ、書籍より脱れよ、  
吾は覓む、わが自尊の心の中、  
吾を救ひ吾を放つものゝ力を。

吾はのぞむ、それを力づよく、執ねく、  
美しき氷塊のごとく明るく、清淨に、  
恐れなく偽るなく、  
世俗を離れて静かなる自尊の心を  
己れのためのみにうち建つる  
そのものを尊まむ。

かくて吾<sup>われ</sup>澄明にして偉大なる

「人道」の浸禮に浴さむことを冀ふ。

ありとある眞實の心を固く身に持ちて

至高の力にうち曳かれ

至善の境に身を守らむ。

おと、生きて生きて、生きよ、

心を激さし燃え立たすものゝ上に

至上のものを感ぜよ、なほも聰明に生きよ、

人は勝利に向つて進むが故に。

なほも至高に生きよ、運命は昏迷するが故に、



精氣と膂力とのうち絶ゆるまで。

夢みよ、放膽なる瞳をもて、至醇に偉大に正義に行ふものゝ凡てに向つて、湧きいでよ、

たとひ神通の力はなくとも、黄金のカナアンの地に、

おゝ生きよ、生きよ、熱狂して

この壯麗なる孤獨の時に生きよ、

願望の焼かるゝなべに、思索の生動せる處に狂へる希望を以て、壯嚴の存在をもて。

言葉より脱れよ。書籍より脱れよ。

われは戦鬪の中、いや果に  
わが勝利を刈り入るゝ鎌を欲せば。

かくて吾は夢む、祈る人のごとくに  
人類の地平にのほりくる凡てに向つて、

英傑にも、はた神にも。

不可思議なる空の虹のごとく

哀憐と憎惡の領土に

よりかゝるすべてに向つて。

彼らが身に持つ瘴毒は



一足一足寺院の奥に滲み入る  
 よし、會衆の俄かに立つて  
 愛をのぞみ、新しき感覺を知らんとし、  
 熱心に、宿命の謎にかゝれる「生存」を解かんと願ふ  
 とも、

すでにその靈自らの映像にて象らる、  
 争亂となほも激しき惑亂のたゞ中に  
 悲しや死の經典の一撃に  
 祭司のむれも、賢き人々も。

かゝる時、見よ格闘と殊勳の上に飛び廻る

勇ましくも鎧はれし言の葉を。  
 明るく、前面に登り來り、揺れ動く、諸々の聲々、  
 かくて——電光と黄金の輝きと——杳かなる有翼の  
 女神の下に翅けりゆく。  
 かくてこの時、追憶の古き暖爐に  
 その靈を暖めむ人々も  
 身は放たれ焔の劔に捕はれて  
 「未來」のかたに投げ出されん。

(L'Action—Les Visages de la vie)

川路柳虹譯



## 座談の中から

與謝野 寛

詩論は既に出来上つた詩に就いてなら面白いが、未來の詩人の製作を規定するやうな積りで詩の本質を論じたりすることは、詩に對して、とりもなほさず自然に對して僭越である。自然は廣大無邊だ。詩は纔にその自然の小さな一角を磨き出すに過ぎない。どんなに上手な工人が現れてどんなに珍しい奥行の一部を浮き出させて見せてくれるかも知れない。詩の未來の悠遠漂渺たるのは其れが爲めだ。詩人は行き詰る。詩は行き詰らない。詩は自然の無邊、無際、無量の象徴だ。

\*

種は無限だから、一つの土からでも多様な花が咲く。詩を論じて一に歸せしめようとする人があるなら、詩壇のおめでたい忠君愛國論者である。

\*

顯正の力の微弱な時に破邪が起る。學問藝術の切れ目に獨逸は四十珊の巨砲を作つて開戦した。詩論のこちたき時、日本に詩が缺けて居る。

\*

詩を愛する人よ、自然を愛する人よ、何物をも吾に容れよ。併せて何物の内にも吾を入れよ。

\*

下の者は詩を読む。中の者は詩人を読む。上の者は眞實を読む。



予は久しく功名欲を失つて居る。従つて詩を失つて居る。予の如き翹つはさなき小人は昇るにバベルの塔が必要であつた。功名欲が其れである。今は崩壊した。予は愁然として廢墟に立つて居る。

\*

予はみづから讀むべき自分の詩の無いのに悶えて居る。予は他人の詩を感服しないのでは無い、自分の詩の逃亡を悲むことがより深いのである。

\*

詩を讀したる俗人の運命を知らうとする人は、予を見よ。

\*

田の草の除くことが他日の收穫のためにあるなら、俳句と短歌とを詩壇

より驅逐することを望む。

\*

短歌と俳句とは上品な浪華節の外の何物でも無い。曾て予の路づれであつた其等の作者達よ、怒おどつてはいけない。予が之を云ふまでには八年の日月を苦痛の中に費した。



私の詩

小山内 薫

信州の山奥

星がちらちら  
風が吹く  
落葉松ばやし  
暗い夜  
雪は凍つて

がさごそと  
草鞋埋まる  
の中

あれ雪が飛ぶ  
山風に  
一かたまりの  
白雪が  
よくよく見れば  
雪の中を



白い兎うさぎが  
逃けて行く  
星がちらちら  
風が吹く

銀かん

小光こみつといふ舞妓まじが  
涼みの床ゆかから  
四條河原へ  
銀のかんざし

落した

ほんほりつ點けて  
床ゆかおりて  
暗くらい水を照らしたら  
流れもせず  
銀のかんざし  
水の底で  
きらきらと。



## 旅人の言

豊島與志雄

はて知らぬ遠き旅に上つた身は――

木影に憩ふことをしないのだ。

春の日に恵まれた若き簇葉の間から、小さな光りの斑点が地に印して、私の視線を引きつけるであらう。見つめる眼が次第に濡んで来るだらう。遠い昔の彼方の景色が記憶に蘇つて来るからだ。青々とした草や木や、清い流れや、物を芽ぐます黒い土地、私が生れた黒い土地、それが私の心を呼び戻すからだ。行く方の空が遠くなつて、來し方の空が近くなるだらう。その夕映の空の下にやさしい子守の唄が響く。疲れた私に眠れ／＼と唄が響く。……遠い旅に上つ

た身には、眠ることが罪惡なのだ。

故郷はいつまでも私の故郷であれ。そしていつまでも私のうちに在れ。私が大きくなればなるほど、故郷も大きく育つてゆくだらう。私の足跡はいつまでも私のものなのだ。然しかく云ふのは今恐ろしいのだ。さらば私は、眞に恐れを知る者の恐れを以て、暫くは黙つて進むのだ。そして信じて眞直に進むのだ。はて知らぬ遠き旅に上つた身は――  
後ろをふり返り見ないのだ。

33  
後ろの遠い森影に佇んで私を見送る父母の眼が、さめ／＼と泣いてるだらう。秋の姿が小さくなり、地平線の末に隠れても、彼等はまだ私を見送つてるだらう。悲しみの夜が暮れ、悲しみの日が明けても、彼等の涙は涸れないだらう。そしてその涙が私の足を縛るのだ。縛られた足を引きづる時、私は途に



迷ふかも知れないのだ。……自らの足で歩くべく擇んだ身には、途を迷ふことが罪惡なのだ。

父母はいつまでも私の父母であれ。そしていつまでも私の肩の上にあれ。私が強くなればなるほど、彼等の心も安らかになるだらう。拒むことはやがて本當に受けんがためなのだ。神にとつては時間はないのだ。そして私にとつても時間はないだらう。然しかく云ふのは今恐ろしいのだ。さらば私は、眞に恐れを知る者の恐れを以て、暫くは黙つて進むのだ。凡てを信じて眞直に行くのだ。はて知らぬ遠き旅に上つた身は――

木影に憩はず後ろを顧みず、たと時々は眼をつぶつて祈るのだ。

祈りのうちに過ぎ來し方がそのまゝはつきり見えて來るのだ。そしてそれが心のうちに生き返つて來るのだ。頭の中に遠い後ろの地平線がはつきり見えて

來るのだ。一筋の自分の足跡が心の中に返つて來るのだ。自らを根こぎにしたる悲しみもそのうちにあれ。父母を拒んだ淋しさもそのうちにあれ。自ら擇んで擔つた重荷もそのうちにあれ。凡てのものをぢつと支へて自らの足で立つ時、私は信ずるのだ、凡てがよくなるであらう！その信念が私を眞直に進ませるのだ。一度動き出したる身は止まる術を知らないのだ。其處に神の意志が働いてゐるのだ。後ろの眼が閉ざされて、前の眼が開かれてゐるのだ。

はて知らぬ遠き旅に上つた身は――たと眞直に進むのだ。

新らしい力が地上に動いてゐる。そして輝いた祝福は空に在る。若草の芽が萌え出で、樹の梢が伸びてゐる。小鳥が空に昇つてゐる。皆眞直に上へ向つて動いてゐるのだ。そして大空に太陽が輝いてゐるのだ。

首垂れて、路傍を流るゝ水に映して、大空の姿を見ないのがいゝ。小さき憐



れみの食のために手を差出さないがよい。顔を舉げて、自らの眼を以て、大空の姿を仰ぐがよいのだ。そして自らの手を以て自らの生命を培ふがよいのだ。はてなき道は遠くとも、彼方の地平線から大いな誘惑が私を招いてゐるではないか。再會する者、獲得する者、肯定する者の歡喜が、其處に大きい手を擴けてゐる。それが私の疲れた足に力を與へるのだ。招かるよまよに、自らの足で自らの生命と重荷とを支へて歩くがよい。神の意志に依る誘惑は常に善良であらねばならないのだ。

## 曙覽を憶ふ

前田夕暮

藁むしろすびつのそばに坐りつつ冬の竹みる曙  
覽をおもふ

饅頭をほほばりし顔にあたたかき笑ひかがよふ

曙覽をおもふ



袖うらの紅き女の拾きて京の町ゆきし曙覽をお  
もふ

竹林たけのこのなかに冷たき握飯にぎいはむ旅人なりし曙覽を  
おもふ

さらさらと茶漬ちまじをはめるはつ冬の朝のさびしき  
曙覽をおもふ

三人の兒いだきかかへてははははと楽しく笑ふ  
曙覽をおもふ

椎の實の十粒ほど盆にのこれるをそばに物書く  
曙覽をおもふ

洩はなすすり洩はなすすりつつ墨すすりつ物案じをる曙覽  
をおもふ



目要輯前奏件

■ 地上頌歌 (詩)	川路柳虹
■ 三行詩六篇 (英詩)	野口米次郎
■ 新佃島閑居之歌 (英詩)	吉井勇
■ 夜となれば (短歌)	前田夕暮
■ 瓦やく家 (短歌)	澤村胡夷
■ 版畫「瓦やき」	亞歐堂田善

語

■ 伴奏小集 去る二月十七日の夜日本橋の鴻の巣で在京社友の小集を催した。來會者は十數人であつたが靜かな温い集りだつた。今度近々第二回を開くつもりである。今度は萬障繰り合せて來て頂くことにしたい。

息

■ 「伴奏」第一輯 は殘部甚僅少だ。欲しい方は今の中申込まれたい、社友もしくは購讀者には一部金卅錢郵税四錢で御分けする。

沈 丁 花 廣川菽泉

朝の路と荷馬車 福田正夫

夜の暴風 前田春聲

雲雀の歌 平戸廉吉



## 沈 丁 花

廣 川 菽 泉

沈丁のほひにぬれて暗がりの小公園を超えに  
けるかな

言しけに争ひわかれ路のべの沈丁の香にぬるる  
かはたれ

うばたまの夜半にこもらふ沈丁のほひにむか  
ひ花を見むとす

掌かたみに揉みて沈丁の夜半のはなに寄ればし  
たしき

街角にすすらの芽を賣る見たり觸れてすぎむ  
な吾妹も愛しく(さる人へ)

春の日のすすらの芽を見むと來て市には賣ら  
ずいろ繪具買ふ

おほけなく切なき怨わくごとし花ひやしんす眼  
にちかく置き



ひやしんす久しく見つたたまの緒のまさにいみ  
じく生きむとおもへや

ひやしんす簇むらり咲かむいきほひにこころ消けたれ  
てあさほらけ居り

三月の鉢の小花を忍かきつつ久しく遭はぬ紅蓮  
洞をおもふ

紅蓮洞吾か扉びのそとに消きゆひさし楊やなぎおほかた花  
となれども

(三、一九一七)

## 朝の路と荷馬車

福田正夫

朝の路だ！

私が古びた自轉車の上につて毎日通ふ路だ、海ぞひの松が黒く、磯に碎け  
る白浪は心よい限りだが、

泥濘には恐れさせられる路だ。

私は數頭の駄馬が雨上りの路の中に悩んでゐるのを傍によけて見てゐるのだ。  
それは重く重く蜜柑の荷を積んだ車を挽いてゐる。

さうだ、村の人々がもいで詰めた蜜柑の箱を挽いて悩んでゐる、



おお、重からう、たしかに重からう、しかし満身の力をこめて馬はウンウンと挽いてゐる。

馬子は傍から力をこめて、『ハイシツシツ——しつかりやれ、』と掛聲をかける。

馬は益々勇むのだ。

馬子はこの頃の忙しさに働いて貰ひたいから糧かひはを澤山やつただらう、

馬もあまりに働くから澤山糧かひはを食むただらう、戦ひの様なこの蜜柑収穫の忙

しさの中に互にその生に勇むのだ、

そして働くのだ、

馬の働く姿

やがて行く馬と車、

馬子はまだ聲を掛けてるんだ、

あの蜜柑が東京の人達に食べられる時、人々はこの泥濘の路と馬と車とを想像し得ないであらう、

そして蜜柑の價と味とのみを評するだらう、しかし私にはわかる——あの生に勇む馬と馬子との心持が、

そしてその困苦が生み出す力と美と愛とを。

勇め、勇め——更に、

私はこの先の路に更に烈しい泥濘を持つてゐる路があることを知つてゐる

——馬だつて馬子だつて無論知つてゐるに相違ない、



さらに、さらに、勇め、勇め、

まだ先は遠いぞ、

まだ、まだ、まだ、まだ先がある、更にあしたが、あさつてが、

おお、力強く馬子の聲がきこえるぢやあないか。

## 夜の暴風

前田春聲

おと、夜の想ひよ、

星々燦めき交す夜をこめて

荒れ狂ふ大風はどよもし、どよもせり。

わが内心こころにも吹き荒こころるる其の風よ。

おと、風の群れよ。暴雨あらしの閃光よ。

寒き夜に苦しき人間の想ひを掻き亂しつよ。

とどまらぬ風の力はわが心に亂れたり。



おどおどと胸のみ烈しく夜の想ひに打ち顫へり。  
 聴けよ。静かなる祈願は起る……  
 おと、翔りゆき、墓の彼方に光と闇の争闘に、翔りゆ  
 くあらしの子らよ。あらしの群れよ。  
 蹂躪られし心の悲しみを、  
 悲しき笑ひに暴風は荒れ狂ふ。

爾が心よ。爾恐れに夜に輝けよ。  
 覆ひ来る夜の闇のかぎりなき  
 其の彼方も愁へざらん。  
 暴風の力、大いなる風の姿、風の悪魔よ。

かゝる夜に吹きしきれ、此の地上の暴風よ。  
 わが胸も破るゝばかりに、  
 懐しき迫る爾の怒號もて。

見よ。夜の想ひは翔けめぐり。翔けめぐる。  
 わが二つの翼は悩みつゝ、  
 感喜べる爾の胸に迸しらんとす。  
 あらしよ。あらしよ。湧き起る暴風の群れよ。夜の宴  
 の轟きよ。

深き世界に眠りゆくなやみなるか、  
 爾ら暴風よ。かゝる夜に。



## 太陽の心

太陽はわが貧しき胸に充ち来るかな、  
 若やかなる象徴の空に溢れて  
 降りそぐ太陽の光に喜よろこは擴がれり。  
 寂しき胸にせきあぐる人生のよき歌は  
 人知れずさよやき出づるなり、  
 あゝ、かぎりなき此の啓きざ示をわれは思ひつゞくる、  
 われをそだつ太陽の力に現れて。

おゝ、地をいたむ悩ましき胸のおもひよ。

感あは喜と悲痛の風に翻られて  
 わが生くる日の胸をはためきかへせども  
 太陽の愛はわが生いのち命を潤したり。

涙、笑、喜よろこ悦の中に太陽は甦りたり。  
 わが心そこにあり。

見よ。高き、彼方の空に耀ける太陽光！  
 彼處よりわが心は來りたり。  
 おゝ、わが生くる日の榮光と苦痛は來りたり。  
 わが胸よ、わが地の意義よ。光の中にめぐまれて、  
 ゆたかなる生いのち命の幻に甦りつゝ。



わが胸に充ちくる太陽のすがたは  
よき生活の歌を齎すかな。  
久遠のおもひ、自由の姿、おと、太陽の心は、  
わが胸の寂しき歌を揺り動かすかな。  
太陽の愛にさよやかれつと、  
われを、人生を、生活を。

(獨語 5)

## 雲雀の唄

平 戸 廉 吉

たとへ柳はあらうとも、今は悲しや歌麿の女はどこに居りませう、若草もえ  
て櫻さく四月は夏にならうとも JAPONAISE のうらさびしさ……………  
あの賑やかな篠懸フラタンの舗道を歩く黒装束、黒いまつすの機械からくりしかけ——黒い屍を  
何としやう——悲しいものは東洋の、野邊に生ひ立つ雲雀の小唄、泣いても果  
てぬ此姿。

路の並木に花がさき、心いきやら憎いやら、栗鼠のやうな踊子づれて、春はう  
れしや巴里の男が、水の流れのさらさらと銀の言葉もすどやかに、智慧の泉の



盃を酌んでは交はす假面會、『私の一生は道化役者でござる』と、されば我等の行く國はユウトピアにはなほ一つ、あの灯の都の思ひ泣き、——黒い屍を何としやう——あゝ何としませう東の野邊のほとりに泣き笑ふ雲雀のやうな微かな姿を。

春

春四月の平野は蛋白石の匂、空に野に神の伊吹は、野の花を小鳥の群を、萬物の心を、大搖籃は靜かに搖蕩ふ。

終日そこに、乳色のほゝ笑よブロンドの漣よ、幼なき心は無限の平野を包んで無垢の豎琴が錦となり花を綴る、春四月の平野は蛋白石の匂を込めて、神の伊吹に大搖籃は靜かに搖蕩ふ。

Ahnung des Schrankende

聖冬朱夕ふ雪二よ四夜降地冬春雨  
塗の空 夜 空 夜 夜 夜 夜 夜  
けゆく 雪よ 胸よ 夜 雪み 夜 秘 歌  
のこのの 足な 歌 歌 歌 歌 歌 歌  
の 上 秘 歌 歌 歌 歌 歌 歌

M. Katsumoto.

山崎泰雄 朱耀謙 正井二 倉石ちか 藤井月泉 大澤歌朗 三幡よし夫 藤井五郎雄 淺田眞佐子 廣田英之助 小室浮鳥囚 清水鳥 窪田子 伊東信 大西花 郊



## Ahnung des Schuankende.

Das Leben wird mir, ziellose Promenade,  
 Woher? wohin? mir ist's ganz unbekannt,  
 Doch muss ich schreiten um arme Ballade,  
 Weil Halten meint Fallen, der Tod genannt,  
 Sieh jenes Tier, wie froh von Gottesgnade,  
 Auf breiem Feld es lebhaft umher reunt!  
 Ich zweifele ob nicht unsere Weissheit  
 Darauf mir stolz sind, ist die Ungewissheit?!

M. KATSUMOTO.

## 聖夜

山崎泰雄

輝くよ輝くよ、今宵燃え滴る戀の月、  
 肉白の甘き木果このみの匂を流し、  
 曇りガラスの朝の色、冷たきを撒いて  
 湧き立つ湧き立つ、喜びの月光の聖オーケストラ  
 青きさゆらぎ空にみちて  
 空は静かなり、足らへる胸を展のぶ。

この一夜、わが大地よ、うち黙し横りたる姿、



されど尊き命はその脈管に溢れ流れたり、  
地の面は冷たし、密ひそかにも張りたる、沁み出づる露は  
緑に凝りて、

樹々は知る、根の力強さを、幹の太みを、

なべて沈黙の中に笑みつゝはあれど、その命リズ  
ムにもえて、

渦巻く月光と、幸を織る、

素足にひたと黄金きんの大地を踏み、立てるは我れ、  
差し伸ぶる雙の腕、いさゝか戦あき、——我は叫ぶ、  
(あゝこれや現まし世に

いとおごそかに、いともみやびし、ものゝ姿ぞと  
——かくて蹲まり、おろがみつゝ  
織りあふひらめきにしばし耳をば傾けたり。

冬

朱 耀 翰

冬の日の梢に  
風もなければ  
にらみ心の  
空はひつそり  
何物にかおぢけたるその胸の



たえず戦きつゝ  
幽かに息を吐く。

土は力をなげうち、  
やつれし胸、さらけ出すなり。  
骨より骨に傳ふるもの憂き唸きは  
枯れし草々の訴への聲と  
母なる土のすゝり泣ける音となり。

やがて淡青き  
あかつきの夢の如くにも

けぶりは森をつゝみてひろがり、  
透き通れる藍色の空に  
夜の幻は恐れつゝかへりゆき  
凍えたる足並にわが夢はよろめく、  
アカシアの葉面に  
はた小徑のほとりに。

あゝ冬の目の  
悲しきけむりに  
消えはてん心いだきて……



## 欲 求

わがなけき  
 あめつちをふるはす……  
 くらきたにそこのいはやに  
 ひとけなきもりかけに、むらさきのみづうみに  
 わがなけきはながれてやまず  
 そのほのほ、みづからをもえつくし  
 そのくちびる、ゆめにうゑて  
 のみほすは——ひたすらにわかきをんなのつみの  
 くちびる

## 朱塗の空

正井謙二

すべての愛は曉に生ず、  
 やさしき心は朱塗の空におく、  
 赤き血の焦点、  
 あこがれの結晶。

さんらんたる反映——

空に輝く絹の一端は光れり。

絢爛の世界。



曉のゆめ。

歩みまた歩みて、  
 山上に思ひ出の日を見ん、  
 はた追憶の消ゆる曉を見ん、  
 なほも、なほも。

林間の獨白

はてしなき竝木のはてに、  
 淡き太陽の光りの夢、

なすすべもなくただよへり。

柔かき草が根、  
 ふれんとするも尊くて  
 わが胸ははけしく鼓動す。

夕

倉石ちか良

汽車のはき出す煙の長々と天と地とのあはひに  
 流れ

鳥、電柱にとまりてなくと



— その夢むる瞳に  
 ただ煙、雲を生むが如し、  
 汽車はゆく、時はすぎゆく、  
 あとの淋しさ、  
 断えず風の、貫き冷やかに  
 うつゝのうちに — 空は涙し、  
 鳥の歌もまぎれて固くつれなし、  
 耳をとぢ眼をつむりて心静かにあれば  
 沈みゆく生の入日、さてどす黒き鳥の羽。

ふけゆく夜

藤井月泉

ふうわり咲いた  
 電燈のもとで女三人  
 黒檀の火鉢をかこみ、  
 ほの白きうなじはたれ  
 針もつ手はわなよきふるふ、  
 やるせなき三人の傷心を、  
 いくたび —  
 縫ひかへせども



とりとめもなく  
針は手をすべり。  
閃めいては消えてゆく。

夜のかなしみ

夜のひとみは  
たよりなくうるみ  
やれはてし築地のもとに  
陰と陰との  
つめたきさよやきは聞ゆ

かなしき潮は  
胸にみちくれど  
涙こほりていできたらず  
十の指もて  
遁れんとする心をとらへど  
なほ洩りて  
さみしき方にさまよへり。

雪よ雪よ

大澤歌朗

雪よ、雪よ



おまへは、空の神々の  
 强健な心から降る  
 強い精靈の結晶、

雪よ、雪よ

しんけんの心の雪よ  
 わが望むこゝろは雪、  
 永遠の清さと冷たさ

雪よ、雪よ

わが希ひを享け入れよ、

弱くとも

弱くとも、虐けられまし  
 弱くとも、蹂躪られまじ  
 わがこゝろ、

いとけなき礫もて  
 まことなる清き結晶の礫もて  
 努め休まずつみゆかむ、

しのよめに起出でよ



夕べに思ふ

田を耕す、農夫等のごとく  
撓まず築かむ、わがこゝろを、

弱くとも、弱くとも

虐らけられまじ、

蹂躪られまじ。

## 二一つの胸

三幡よし夫

せつなき胸の二つ向ひあひ居し、身にぞ沁みける、

その夜、なにか忘れめ

燃え果くしたるいと深きなやみと

なけきにうちしめりたる死灰よ

さなりわが心はそが灰の如とはにかなしきかな。

われはまた胸のいたみに堪へず、

かみしめたる唇、疲れ果てし瞳の

哀訴に満てる優しき女故に、切なし

われは死なんと思ふまで――。

暫し時は流れ行く沈黙の夜に、

かなしく向ひたる二つの胸――



そをうちめぐりてあはつけくはこび行く  
柱時計のせ、こんどの啜泣き……。

われはときめく心持ちつ

汝が前に黙してゐたり、

火桶隔てよこのいたむ心を持ちて、

あきらめがたき戀のをはりに

わが心臓の扉は狂ふ血潮に號泣す……。

青ざめうるむ汝が瞳

とどめがたき涙は滲めり、

暗き雨夜のなかに

海を泣きわたる千鳥……

そがとぎれとぎれのかなしき旋律、

わが胸の扉にひびきしみ入る。

物くるはしけの汝が肩の戦慄よ、

せつなき胸の二つ向ひあひるし身にぞ沁みける

その夜、なにか忘れめ。

よろこび

藤井五郎雄

田面ひとつに

散りしける春の雪



かすかにみゆる

青き麥の芽

これぞわが

去りし秋

掌ににぎりしめし

麥のたね

青 春

瀬の音の、かるき風にとけ

早くも麥の芽の青みくれば

か弱き若人の心ぞいたまし  
 雨のとぎれを啼きいづる雲雀  
 高くたかく雲の青みをえらび  
 何物か求めんとする心  
 ひたすらに戀人をのみ趁ふ  
 はてなき我が胸のふかみに  
 思ひあまりて涙とどめなし

四月の夜

浅田真佐子

四月、夜は朧銀の



空美しく星更けて  
水田の夢のほのかにも  
風なまぬるき肌心地

寝をびれ蛙をかしくも  
田の畦草の下に來て  
なまめき戀のさどめ言  
嬉しくくよと笑ひたる。

さて不思議なる世のいのち  
「春」をめがけて燃えいづる。

### 川岸の宵

橋の袂の焼鳥屋

その『やきとり』の行燈に  
いつとはなしに灯が入れば  
河岸は涼しい人通り  
ちらりほらりと暮れて行く。

水の上行く涼み船  
涼みの女も美しく  
波と風とに揺れながら



思ふとてなく暮れて行く。

ひとり欄干にもたれより

そなたまつまにほんのりと

柳にかよる宵の月

すこしみだれた髪の毛ほどに――

### 夜の足なみ

廣田英之助

鈍色の空に雁鳴きわたり

ぬき菜の畑浮み上りて、

水草のうす色の花に  
黄昏の光はくれなやむ。

ひとり、犬に引かれて

ほそ道をゆく

うつよなのひと。

仄にも暮れのこれる

路は浮彫。

両側に、

首を垂れて稻穂は眠る。



曳かれゆく足の重さよ！  
うしろより何ものか絡まきひつくらし、  
やはらかに――  
忍びよる夜の足なみ。

降る雪

小室楚囚

灰色の空より  
降り来る雪  
日の光明ひかりのごとく  
隙間すまなく、柔やはらかく

85

黒き地に觸れ  
神のごとく冷却つめたし  
地は戦いくさき慄おそひ  
涙なみだに潤うるほふ  
されど雪は降る  
涙の土地に柔かく  
清き雪、白き雪  
隙間すまなく、柔かく  
白きよろこびに  
涙の土地を覆ふ



## 彼の女に

およいとしの人よ！

吾は汝を愛す

吾が愛のすべてをさよけ

なほ足らず汝を愛す、

されど吾悲しむ汝のまへに

哀れにすより泣く犬のごとく、

汝は何故に開かぬ

汝が美しき花園の鐵の扉を

あゝおん身は拒む

扉をうつ吾の手をば。

吾は黄金の鍵を持つ、

されどわれは空しく汝のまへに佇めり。

花園は甘く春の日に輝けり、

汝は黒き壁もて汝の花園を覆へり、

黒き夜の、美しき自然を覆ふごとくに、

あゝ吾は汝の花園を待ちのぞむ。

また月をのぞむおほろ夜の中、



われはひたすらに心を燃やし、  
ひたすらにほひに焦る。

開き得ぬ鍵何を贏ちえし、  
吹き得ぬ風何をもたらず、  
いとしの人よ、  
開けよ、また投げよ、  
月の光りを、愛の光りを。  
悲しくも歎すげ歎く犬のごとく  
われおんみ汝の花園を待ちのぞむ。

## 地上秘歌

清水浮鳥

われは夢む、  
薔薇の匂ひ、ラヴェンダアの香り  
さては浮動す馥郁たる黄昏たそがれ時。  
われは樹木の陰影、風の私語  
木の間駈けめぐる  
小さき獣の命。



われはいづち通ふによしなき  
 荆棘路に新咲の  
 玫瑰の花の精。

われは  
 眠りつゝ海へ入る  
 流れの謔言。

われは風荒める廣野の  
 空高く翔ける大鷲の翼  
 時を忘れぬ曉の眞珠。

われは雨後の日光の  
 踊れる黄金の足  
 われは思ふ、切に切に歌はんことを。

## 冬

## I

窪田照子

黄色い光り、  
 流れよるなつかしみ、  
 うすもゝ色の指先に、  
 そつとしのびよる初冬をつめたさ。



ちつとみつむる  
ひとみの冷たさ、又黒さ、  
そのかけに、  
ほのゆると銀の泪。

II

べこにやのはなの  
うすれし香のかけより、  
くもりゆく青玉の  
つめたきおもてより、  
しみじみと

さりゆく秋……。

春

伊東慶倍

めざめにすゑる  
珈琲のうれしさ  
舌をすべりて匂ひこめ  
ゆらゝにのほる湯氣のなか  
さて、「春」は勇くらし。

春の光りへ



けたましく叫び  
 卵生みたる鶏は  
 いつさんに  
 春の光りへ——  
 春の光りのふる中へ  
 おどりたつ。……

狭き鶏舎の  
 仄ぐらき中に  
 忘れられたる卵の白さ。

## 雨の歌

大西花郊

がらすどあに曇りがませば  
 空すより泣くかと  
 雨しみぐくと降り出づる、  
 野はさみどりに  
 祈る人のごとく  
 晴やかに空を仰ぐ。  
 われは部屋にひとり、  
 雨はしみぐと。



春鳥集

大西花郊	篠井柳朗	尙時	大澤歌朗	倉石ちか良	滑川義彦	大澤忠一郎	淺田眞佐子
	高橋典一郎	伊東慶信	西川二紫星	大島武男	藤井五郎雄	石渡白映	渡井春雄
	勝本正晃	林早枝	高橋一峯	正井謙二	伊東青暮	三幡よし夫	廣田英之助

相聞

淺田眞佐子

ひとはなを摘みてもなにかものおもふまでに悲  
 しき戀をこそすれ  
 人棲まぬ世界のはての小島へとゆかば足らふと  
 舟もこぎなば  
 何かさて人のなつかし靄迫りあこがれ寄るとお  
 ほしき夜路  
 君戀ふる心にみいる大空ははてなき色に涙ぐま  
 れぬ  
 美しく白く尖りて君思ふ一つとなれる糸切齒か



も  
 香のうせし香水と見れば見らるべし戀はすれど  
 も足らぬは心  
 あやめ色の煙りさやかに野は淺み小家しづかに  
 晝となり行く  
 陽に光る草の芽の如わが胸ぬち何かさやかにき  
 ざすよろこび

## 孤 寥

渡井春雄

子供等の戦争ごつこにまじりつよさはけど浮か

ぬ我が心かも  
 かの君とあれば一語を發しえず戀まされどもい  
 やに淋しき  
 たまにあひて多くも口を聞かざるを君などがめ  
 そ我どもりなり  
 思ふ事なかばもいへぬ悲しみをうなづきてあり  
 や君の瞳よ  
 はいとり蜘蛛はいをねらひて身ぢろがすいとゆ  
 るやかに陽は沈みゆく  
 小雨ふる日狂へる人はぬれながら女の名前をさ  
 けびてゐたり



雨晴れぬ枯草かわく香をしめて原一面に陽はふ  
りそよぐ  
夕暮のもやの中より啼きいでていづこへ行くか  
淋しき鳥  
すこしばかり雪ふりきたりすぐやみぬきみにお  
もひのかゝる冬空

## 山鳥のいのち

廣田英之助

銃先にねらはるゝ身を知らざるやあはれ小鳥は  
實を食めりけり

餌ばめるをハタと射られてたまゆらに消えてい  
ゆきし小鳥のいのち  
南天の根もとの雪に血を吐ける小鳥の死のあは  
れなるかな  
鴨を撃たむと森に來し男大樹のもとに風をきよ  
をり  
年ゆく夜いぬるに惜しく雪溶けの街より街をそ  
ぞろ歩きぬ  
酔ざめの口のかはきにバナ、など喰みつゝ年を  
迎へけるかな  
暗やみに投げし煙草の吸がらの赤く消えゆくさ



まを見て居り

春光

大澤忠一郎

刈株に細々芽ふく青草の冬陽ふゆひの中にかすかにゆ  
れつ  
枯草のふるひはやまず信號機只赤々とそびへけ  
るかも  
みとりめの笑つて取りし體温器深く見入れば悲  
しくなりぬ  
「弱き兒」と話し合ひける母の聲いたく響けば耳そ

ばたてり  
もの思ふ我が眞向ひにそつけなく頁くる君のあ  
どけなき姿  
もどかしく投げたる小石音なきにますます強く  
投げにけるかも  
打たるれば其度毎に四足をふるはせつとも動か  
ざる馬

春淡き朝

石渡白映

若芽出し柳の雨にうたれたるそのうなだれて春  
の淡きを



鋼鐵<sup>はがね</sup>めき葉先きらめく樹々の間に旭日眞赤にさ  
 しにけるかも  
 斜めさす光りするどくのぞきこむ籬<sup>かき</sup>の内にはと  
 りの唄へる  
 ほのかにも地<sup>つち</sup>に影しくおほろ月夜松は眠れり吾  
 も眠らん  
 碧海はよえるが如し幾波<sup>いば</sup>をりうねりのひまをよ  
 ろめく白鳥  
 紫に立つ煙かわく朝の陽はいと心地よく雫に光  
 り  
 まだ若き小年の日と草の芽とのびる力の共につ

よきを  
 ことくと姉が刻める庖丁の音のさびしく起出  
 づる朝

晝の雨

三幡よし夫

積み藁の間に咲ける山茶花になやめとばかり晝  
 の雨降る  
 うつし世にあらぬところと積む雪は童話の國を  
 庭につくりぬ  
 思ひわび枯木背にしてたゞすめば梢ゆるごとに



夕日も慄ふ  
 かたりえぬ命いだきて死ぬべしや云ひがたしと  
 てしのびがたかる  
 うらみつゝ酒ものみけりたばこまでかくても人  
 は忘れぬかな(女)

## 鷗

滑川義彦

海原は春日たよたよたよとよへり鷗の片羽白く光  
 るも  
 春の海ひた戀しさにひとりきて海を見いりぬ海

は青かり  
 病みあがり久に見ざりし海見たり眸いつぱいに  
 海は青かり  
 素足にて踏まゝほしとて足袋を脱ぎ踏みたる砂  
 の足ざはりほも  
 春あさみ眞砂子をほればあらはるゝ草の若芽の  
 まこといとほし  
 春あさみ陽光あまねき渚べに貝拾ふ娘の眼はつ  
 ぶらなり  
 まるらかに雪をかつぎし裸山陽光に輝けば尊き  
 ものを



トロツコに乗りてうつとり春の陽を背いつばい  
 にむさほる心  
 亂杙を飛びうつりつゝ鳴きやまぬ鶺鴒の脊に春  
 日のどかに  
 一めんの青き麥畑晴れわたり黒き影さす鴉の羽  
 音  
 さつさつとふれて鳴る音す鴉の羽麥の青野を渡  
 りゆくかも  
 春の野の緑うれしみどづかりといねてなんにも  
 思ふことなし  
 野火消えてあらはれ出でし石ころの温ぬくもいとし頬

ずりをする

別 離

藤井五郎雄

こともなきたゞの別れと思へとや語らば泣くを  
 心切なし  
 一二年雇はれの身と吾ならめかくいへば黙しう  
 つつむける汝  
 吾がまきし麥めをふけるうれしさよ空のもとに  
 てしばし去りえず  
 かの窓をひらけば汝の針仕事してありと思へば



戦く心

## 橋影

伊東青暮

山の嶺ねゆましたに見ゆる東のこゝの港は風ぎて  
 けるかも(筑波艦沈没を悼む四首)  
 漣も立てぬものかもしかはあれど筑波戦艦沈め  
 るが見ゆ  
 あらたまのその良日あらたに町震ひあなと思ふに沈め  
 る艦ふねか  
 あきら日にその煙突は直すくなれど波より出でて煙

は吐かず

## 耕人

倉石ちか良

今日も又畑にゆけと父の言ふわれはあはれや本  
 を見ざりけり  
 眞夜中にふいと目覺めて父を見し幼兒あはれ涙  
 あふれき  
 冬の夜の静けき中に下駄の音父の歸りかわれは  
 ぞと見ん  
 麥畑に斑らに消えしけさの雪灰色の地は凍りて



固し  
不安なく野にでてあれば冬風が青みし麥をゆす  
るうれしさ  
大いなる望みもなにも地にすてゝ百姓をすれば  
父のよろこぶ  
いつになればこの百姓をすてることか雪の野に  
でて涙ぐみたれ

紅 椿

大島武男

つゝましくこもりゐてこそ衣きぬつむぐ我妹はいと

ほしきかな  
群放れひとりほつちで遊ぶ兒のわれの如くも淋  
しまれぬる  
公園に入ればまづ見ゆ紅椿ぬくく日をば浴び  
て居たるも  
春淺しこの苗床の新芽みなほつちり出でしがい  
とほしきかな

父の歌

正井謙二

嘴はし赤き一羽の小鳥せんだんに鳴かねば父は死に



給ふなり

小夜さよふかみ父の焼場の火を見ればま赤く燃えて

悲しかりけり

悲しさにたへつゝ今日も父を戀ひみかん畑のみ

かんまつりぬ

靴下をあみつゝ今日も山焼けを妹はひとりなが

めけるかも

片方の光れる雲を指ざして脊の子すかす妹なり

けり

春來れば學校にゆく妹のかばんを買ひに町にい

でけり

青草のなかにひとりて君戀へばさみしく見ゆる  
冬の山かな

心なくむしりし黄草握りをりあひに行く日はか  
なしきものよ

きりぎしにとんほ止りて金の目をくるりと廻す

夏のまつびる

夕日さすだらだら阪に黄に光る釣鐘草はさみし  
かりけり

寫眞

大澤歌郎



いとけなき弟も見るわれも見るをさなきをりの  
 戀のうつしゑ  
 はらからも母もそ知らぬひそかごと清くたゝむ  
 を悲しみにけり。  
 いつまでもいつまでもたゝながめたきひとのう  
 つしゑ手にはとりかねつ  
 晩秋の日ざしさむしく落ちつくすはだらにまる  
 ぶ牛の小舎はも  
 かすかなる光りもなれが身に散れば銀とおもほ  
 ゆ白き犢よ  
 かもめ飛ぶことのめづらし街の子よ海見ること

の常ならざれば  
 海に来て灰色の街に生れたる吾等平凡のこゝろ  
 かなしき  
 子供等が砂原に来て寝ころべるたのしき遊びひ  
 とり眺めぬ

## 破障子

西川二紫星

試みに破れ障子に息吹けば胸さす如きひときし  
 にけり  
 北國の雪の多きにたまけたる妻の顔はもおかし



き朝  
 かき分くる雪の下土ぬくければはつはつとして  
 芍薬めぐむ  
 雪かけば小指ちぎると冷たさに蕪菁も掘らずわ  
 が影をみる  
 ひたすらに山にきたれば悲しかり洞ほらやに入りて聲  
 たてよぶも

## 雪と小鳥

高橋一峰

ひとりして終日山に働けば小鳥よ愛かなし雪喰ひを

り  
 残雪はなほ古株に積り居り甘藷喰ひて雪をばう  
 ばる。  
 土方らの我れをみかへりし其目色何かけうとし  
 淋しき心よ。  
 いつになく晚くいねたり目つむれば走る汽車の  
 音心地よきかな  
 我が二十の朝日も同じ二十一の夕日も同じなん  
 にもなきかな

## 猫柳

筏井柳郎



たまゆらの舞ひつゝ土にかへる葉のことだもさ  
 びし夕の樹立に  
 入日空餘光のなかにさびしもよ種蒔く男ほつち  
 りと見ゆ  
 蕎麥の花いちめん白きさびしさよひつそりとわ  
 が煙草を吸ふも  
 すゝき穂に露ひかりそめ夜ふかしと云ひよる君  
 が手をとりにつれ  
 雪ふかくあかき椿の匂ふからひそかにひとを戀  
 ひもこそすれ  
 猫やなぎ厨の水に光りそめしづこゝろなく春立

ちぬらし

青き麥畑

高橋典一郎

此の我れに嫁ぐと云ひし彼の女此世に一人よし  
 みじみと愛し<sup>かな</sup>  
 よく續き吹く風かなとつぶやきつ見合を終へて  
 歸る麥畑  
 筑波山霞の中に眠りる何もなし得ざる我れの  
 如くに  
 若き故いのちのかぎり働かむ雲雀鳴く野を肥か



つぎする  
 久しくも土を踏まねば我足の色の白さよ愛しく  
 てならず  
 美しき人の立居て見てをれば重々しくも引きし  
 弓かな

## 野ごころ

伊東慶信

田舎にゐて風呂屋の子にてありしならばかくま  
 でつらき日をや見すらむ  
 かた時もものせであらば大いなる價あるもの失

ふごとし

貯金をばすつかり出して求めたる二人の机の反  
 りたるかはや  
 思ふごとと商ひならずもの云はで煙草喫ふ父見る  
 が悲しき

## 荆棘の刺

林 早 技

冬枯れの岡にさまよひ傷つきし荆棘のさよ傷今  
 朝も痛める  
 君戀いてさまよひてえし傷なればいとしきもの



のなかに數へぬ  
 洗髪その快き觸感を君と別れのキスにたとへぬ  
 かよる事云へば悲しも擁きあひ三たびは唇をは  
 なさどりしを  
 人間の性を知りしは唇を君に吸はれし驚きのと  
 き

## 潮音

尙時

潮きたりたゞひとときにうばひ去るわが足跡の  
 かなしかりけり

ひとり身に出湯の雨をきく夜のおんまの笛が悲  
 しかりけり

南の海べ椿の香るしたわが戀人は我を待つらん

## 野の空

大西花郊

プロペラの音ぞ聞ゆと見上ぐ空鴉たまさか過ぎ  
 にけるかも  
 くるぐと土に塗れて甘藷ほる父よそに見て旅  
 立つわれは

來ん月も雜誌買はんと雪の夜を納屋にこもりぬ



繩をなふかも

松林伐りばらはれて明るくも貧しかりけるわが  
家なりけり

春

勝本正晃

なま竹の白き切り抹はなまめかしこよら山の  
里ちかきかも

なまなかに人に似ますな神佛春はさらぬだに阿  
呆けて見ゆ

夕風の沖の大船大どかに動ける如く動かぬ如し

髪

松本福督

北の港

秋月露村

孤獨の面

澤ゆき子

丘の月

川路せい子

至高の律(ヴェルハアレン)

曾野簡治

食後の卓

柳虹生



## 髪

松本福督

ほかほかと地の面に春日ふりやまず女温湯に髪  
 ひたしけり。  
 ゆるやかに蒸氣のほる春の水女さくさく髪洗  
 ひけり。  
 早瀬あふこよな小川の河楊淺緑そめ萌えにける  
 かも。  
 吾が指を弄びつゝ紅燈の情話語りてしづ心なし。  
 天さかる鄙に住む妹よ時鳥來なくとよめは吾は  
 いゆくに。

朝戸出に來鳴く梢の藪雀春さりくれは呼びたて  
 鳴くも。  
 移り住む宿の築山杜つづき夕霧たては家し偲ば  
 ゆ。  
 街さかるかりそめの宿の植込の繁みは鳥も春を  
 來鳴かず。  
 いちねんにやらかき炭團まるめをる女ひそまり  
 くだかけの鳴く。  
 いちやうに春日にぬれてうつむける女手黒く炭  
 團まるむる。

一九一七年二月下浣



## 北の港

秋月露村

棧橋に横著にせるロシア船の腹をま赤くそむる  
 入りつ陽  
 娘ひとり佇みてあれば又ひとり來りて並ぶ夕暮  
 の海  
 秋山に深く咲く花つくぐと見つめてあるに涙  
 うき來も  
 秋深き山のましたに輝ける瞳の如き海のなつか  
 し

冬の日の薄きを浴あふて蠶豆のはつぐ青む冬山島  
 冬雨の夜の蒼をひそくと濡れて人夫等押しだ  
 まりゆく  
 冬はれの空を仰けはうれしかり鷺の一つら輝き  
 わたる  
 今頃はいつちの驛や過ぐらむと時間表などすと  
 ろ眺むる  
 淋しさに吹く口笛にひよつくりと犬飛び來たり  
 尾をふりにけり  
 月の夜の野の輝きのまん中にひつそり立てる一  
 もと遠樹



## 孤獨の面

澤　ゆき子

静かな夜に集る光は、  
 梢のねむりの上にうたへり。  
 やはらかきしのび泣きは空よりうごめき、  
 わが思の焦点はけだるし。

たゞ暗き墓標の如き身の灰色を、  
 しのびがたきこどくの愛をもて彩れよ、  
 たましひは春の潮と音高くみなぎるとも、

わが接吻の力はかくもかよわし。

ふかき夜に影はやさしき  
 森の葉よ、ねむる葉末のさよやきよ、  
 わがそうぞめく心の底にひきかへて、  
 憎きまでそのしづけさは身に甘し。

やすらひのねむりのひまにわきおこる  
 嵐よ、嵐よ、さて匂はしき接吻よ、  
 いづこの世よりわれをよびてか戀の涙に濕ほさ  
 しむる。



## 「過去」とこどく

美しくしき酒をとりてかへり來れよ。

そのあふれたる背後のかんばせに、

沁む匂と幻と……

あゝ戀の背後のかんばせのみひとり輝く。

かくも身の自由が持つ悲しみの長さに溺れ、

とりとめもなく泣かんとする戀は、

小鳥のちさき羽根の如き親しさにてあれ。

心の中に求めんとするものは、

こさめの如くなつかしく

腕をば與へし時の日ざしの如き柔かき慄き。

蠟の如きわがおもひでのあまりに淋しければ、

けざやかなるうたのひどきを迫らしめ、

うれしき酒の熱ほてるを顔ほらにのほらしめ、

かくて、云ひしれぬ涙をもて心をば優しくせむ。



## 丘の月

川路せい子

一足くと、晝が逃けて行く野のはてに、黒い波のうねりになつた足下あしもとの森に、やるせないあくがれを寄せて、私の目は長い間、それらの上を行きよして居ました、

「おと」

ふつと私が涙ぐむだ心をもたけた時

まあ瑠璃紺の空から、私を見守つて居るものがありました、

王妃が池の中に抛たと云ふ金の冠の一片なのです、

私は何も忘れて立ちよりました、その時私の胸はうれしさにふるへて居まし

た、けれどそれは冷めたい笑みより抛る術すべを知らない黄金のために、やがて私の心はつれなさでいつぱいになつて終ひました。

あゝ、黄金の美しさは、私のために輝くものを何んにも、もたなかつたのです、

細い丘の道をかけながら戀人の手へと歸る私の胸には、あつい血潮の流れるのを知りました。

## かげの葉に

黄金色の樟子におのよくかけの葉よ、

ほのかなる故に、私は汝の命を尊びたい、



もゆる程、強い戀さへ、口づけの、たまゆらには消えるもの、  
 はかなさになけく心よ、  
 はかなさ故に、物皆は美しい  
 太陽と共にうすれ行くかけの葉よ、  
 私は汝を、力の限り讚美する。

## 至高の律

(ヴェルハアレン)

曾野簡治譯

いくとせいく年ののちか、さはれ夕に  
 彼女の靈たまの焦燥は來りぬ、そは  
 汁液なきものゝ凋萎がれ、愛なき白き花とも  
 熱き幸福がそれらを破りしごときものなり——  
 またかつて空に暴風あらしの起りしとき  
 彼女は悦びて昇天しぬ、そはその光りぞ證明をたてたる。  
 かくて甘くひろき顫慄は彼女の上に滑りぬ——  
 彼女の肉の深きに感ぜよ、夜は



彼女の纖手をふくよかな彼女の胸に置きたり。  
 彼れは感じぬ眠れる人の  
 遽かな劇しき目さめに動くを  
 その風貌ふうぼうと腕をうち亂し、軀はゆれたるを、  
 そのとき天使は夜に問ひぬ、  
 されど夜は閉されて沈黙にゐぬ。  
 彼れは甲斐なく語りいでぬ、おのおのもの  
 素裸の源もちて彼女の傍へに住へるものを  
 鳥を花を、また冷たき行く水の鏡を。  
 これらによりてはしなくも、彼女の未知の想は浮びた  
 りき。

## 食後の卓

柳 虹 生

生きよら！

この月も自分は病氣で寝た、そのため平靜な釋放されたやうな數日を送る事が出来た。然し色々の煩はしさから全く脱れる事が出来たのは自分が熱で苦しんで居た僅少な間に過ぎない。少し平靜になつた時自分の意識の中には微細な活動の世界の影が映してゐる——求めずとも映してゐる浮き世の影である。自分はそれから脱れようとする心の弱さをつくづく眺めた。そしてそれは自分から求めてゆくべき生の力であることを知つた。健康といふ幸福の上に築かれる生の影である事を知つた。煩瑣が何だ。Vivre, Vivre et Vivre とヴェルハアレンの句を心竊かに口誦んだ。

忙いそがな

世間には俺はエライと意張る人がある。それは立派な個人主義の上から見れば何でも無い云ひ分である。同様に俺は天才だと云つても自信の上からなら差支へない。けれども俺は今にエラクいそなるぞとか今に天才あまになるぞとか前觸まへふをする人がある。彼らの云ひ分



として俺は俺の中にまだ成長し切らないものがあるのだといふ。そう見ればどんな人だつて悲観はない。けれども古今の天才で俺は今にエラクなるぞと前觸ればかした人はさう無かつたと思ふ。自己の眞價を認められず強辯した人はある。ニツチエは自己の價値のために「この人を見よ」を書いた。けれど自分ばかりが架空に可能と信じる自己の運命をなんで人に強辯する必要があらう。エラクなつた時辯じればいいでないか。またかゝるくだらぬ辯護より作品そのものがよく證明する。作品が凡てである。私は今の一部の所謂人道派の作品に感銘深きものを見出すと同時に甚しく滑稽なる言論を合せ聞く故にかく云ふのである。

自分は思ふ。何でそうあわてゐるのだと。自分はよく路上で鈴成りの電車にアワてふためいて乗る群衆を見てさう思ふ。東京驛のアスワルトの上をカチャカチャと奇妙な足駄の音を鳴らし乍ら汽車に急ぐ乗客の下等さを思ふ。なんといふ不恰好だ。何んといふ落付のない様だ。何んと云ふケチな心だ。もつと悠々と大道を濶歩する度量はないのか。モツと莞やかに穩かに歩く氣はないのか。我無舎羅な力で人を壓しのけるのが個人主義だと誤られてゐる。嫉妬や讒謗が藝術的な神經質だと唱はれてゐる。そんな汚い根性の上になんで偉大な文學が榮えるか。詩が湧くか。鋭い理性の上に立て。迷ふな。落ちつ

け。エラクなるのは自然にエラクなる。努めて時を待てば得られる。自分は今の文壇の若き人々がかの東京驛の汽車に忙ぐ群衆の如く餘りに自己を忘れた滑稽な焦燥に自己をエラクする事のみを念ずるのを笑ふものである。

### クラシックス

福士幸次郎君は文章世界にいた詩壇時評のなかに僕や三木君始め先の『未來』に據つた一派を保守派象徴詩派と云ふ名の下に一括した。流派の名前は批評家のそれ／＼好む處に據つてつけえらるゝものであるから（よし福士君が純然たる批評家でないとしても）何とつけても關はないが福士君の云ひ振りによるとどうやら保守派といふ名前は悪い意味のものであるらしい。なるほど急進が保守より優れた事であるのは一見判然たる事からであるが然し一個の文藝がその獨特の地歩を得それに依て呼號する時既に保守たるを免れない。文藝史上のクラシズムは問はずもあれ、如何なる主義如何なる流派にしるその地歩を人の既に認め得た時そのものは純然たるクラシックスではないか。またクラシックスとなつて始めて自己が本體を明らかにし得るのではないか、此の意味に於て自分は最近詩壇に幾何の詩が果して確固たるクラシックスの位置を得たかとをさへ疑つてゐた矢先、聰明なる我が福士君によつて三木君は云はずもあれ小生に至る迄その光榮あ



る保守の城域に立つ事を得たのである。これとりも直さず小生の詩も既にクラシックとして認めらるゝほど確固たる姿を得たのであると思へば誠に有り難い批評である。けれども眞面目に考へるとこの批評はあまりに片付けすぎた批評である。福士君の眼には僕の詩も三木君の詩も同じものに映るのであらうがもうすこし多様の姿を多様の眼識に依つて見分ける能力があればそう薬品の瓶に張紙をするやうに『保守』と尊い名前を張り付ける事も簡単ではないと思ふ。況んや象徴派人道派曰く何派曰く何々派に於てをや。

小曲集 (社友に)

来る六月の「伴奏」には出来る丈短い小曲風の詩を集めたい。十行位の長さでかいて貰ひたく思ふ、締切は編輯に間に合へる丈の範囲に於て待つ。なる丈け早くよこして下さい。最後が四月廿日。

\* \* \* \* \*

□詩の講演會を春やらうと思つたが少し準備の都合があるので秋にのぼした。秋には新しく作曲した詩も誰かに演奏して頂かうと思つてゐる。

□「詩歌講義録」はこの八月頃迄に全部纏めて出すかも知れない。これのみの讀者が可成り多いので特別の便宜を計りたい。

大正六年四月一日印刷  
大正六年四月十日發行

伴奏第三輯

(春の巻) 奥付

編輯兼 發行者 川路 誠

東京市本所區番場町四番地

印刷者 飯島省一

東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社分工場

伴奏  
不許複製  
定價金四拾錢  
郵稅金四錢

發行所

東京市小石川區  
丸山町十七番地

曙光詩社



## □ 曙光詩社清規 □

### 詩社の目的

□ 曙光詩社は、新しき詩歌の作者、研究者、愛好者より成る一團です。  
□ 曙光詩社はあらゆる詩歌の作者、研究者、愛好者に資するため、一般社友を募集し、年五回詩文輯「伴奏」を發行し、尙初心者のため同附録として「詩歌講義録」を刊行して之を頒ちます。  
□ 曙光詩社はその一切を川路柳虹が主宰し社友の詩歌に對する批評添削質疑に應答します。

### 社友及作物

□ 社友は二種に分ち、普通社友特別社友とします。普通社友は毎月左の種別の原

稿を送付し之に對する批評添削を乞ふ事が出來ます。

- △長 詩(行數を問はず) 二篇迄
- △小 曲(十行以内の詩) 三篇迄
- △散文詩(百以内) 一篇迄
- △短 歌 二十首迄

特別社友は左の種別によつて批評添削を乞ふ事が出來ます。

- △長 詩(行數を問はず) 三篇迄
- △小 曲(十行以内の詩) 六篇迄
- △散文詩(百以内) 二篇迄
- △短 歌 四拾首迄

(右の範圍内に於ては一人にして數種を兼ね寄稿して差支ありません。)

□ 批評添削を乞はるゝ原稿は字體明瞭に現住所氏名を明記し各行間に餘白を存すること、貳錢郵券を添へる事とを注意して下さい。「伴奏」誌上に掲載すると否とに關はらず原稿到着の日より廿日以内には加筆して返却します。掲載すべき原稿は指定しますから返稿の中から其の作物丈け再び清書して寄送して下さい。原稿縮切は毎卷發行前二十日とします。

### 「伴奏」及「詩歌講義録」

□ 「伴奏」は年五回發行の菊半截形紙クロース毎頁百五十頁内外の優美な詩集で社友の詩文及現代詩壇の諸名家が得意の創作を掲載する他研究材料として毎篇川路柳虹の詩論若くは評釋を掲げます。

□ 「伴奏」は一年五回左の期節に於て發行

します。時日は出版の都合で一定しません。凡て其の月の廿日前後とします。

- 新年の卷 (一月)
- 春の卷 (三月)
- 夏の卷 (六月)
- 秋の卷 (九月)
- 冬の卷 (十一月)
- 別 輯 (臨時)

□ 「伴奏」は社友には無代で配布します。

□ 「伴奏」は毎卷特に初心者のため附録として「詩歌講義録」を附し特別社友には無代で配布する他實費貳拾錢送費貳錢を以て「伴奏」同様希望者に頒ちます。

□ 「詩歌講義録」は菊半截形四十頁内外の小冊子で専ら初心者のため詩歌の概論作法評釋等に涉つて川路柳虹が講義します。



### 社費及購讀費

□社友は普通特別共に毎月社費を納める義務があります。普通社友は一ヶ月金參拾錢、參ヶ月分金九拾錢、六ヶ月分金壹圓八拾錢、一年分金參圓五拾錢とします。又特別社友は同様に一ヶ月金五拾錢、三ヶ月分金壹圓五拾錢、六ヶ月分金參圓、一ヶ年分金五圓五拾錢とします。社費は便宜上三ヶ月分以上を納付せられたき事、又毎月送附せらるゝ方は必ず前月末迄に翌月分を前納せられたき事、送金は必ず郵便爲替に限る事等注意して下さい。□入社希望の士は必ず規定の社費を添へて御申込み下さい。又入社は隨意なるも中途退社には前金を返却しない事に決めてます。前金切の節は「伴奏」の包紙が葉書

で御通知します。

□社友とならず單に購讀者として毎卷發行毎に「伴奏」を購讀するゝ事は自由です但し作物を寄稿する權利はありません。「伴奏」購讀費は一冊金四拾錢郵税四錢三冊分郵税共金壹圓參拾貳錢、同五冊分金貳圓貳拾錢です。

□「伴奏」附録「詩歌講義録」は直接購讀者以外に書店に於ては販賣しません。講義録の無代配布を受けるものは特別社友のみに限ります。普通社友で希望の士は實費を別に出すか特別社友に變つて下さい。但しこの講義録は詩歌の初心者に向つて發行するものですから特別社友であつても要なき人には送附しません。

□「詩歌講義録」の購讀費は一冊二十錢郵

税二錢、三冊郵税共六拾六錢、五冊同壹圓拾錢とします。

□「詩歌講義録」は一年五回を以て終ります。其の第一回は 大正六年一月より同十二月に至つて完了します。「詩歌講義録」は「伴奏」の發行毎に一冊づゝ發行する以外は刊行しません。但し購讀は何時でも隨意です。

### 支部及支社

□本社の社友三名以上のある土地には支部を設ける事が出来ます。また十名以上ある土地には支社を設ける事が出来ます。支社の命名には其地の名と上に曙光詩社といふ文字をつけて其の存在を明らかにします。支社には毎卷一部づゝ「伴奏」を送ります。支部並びに支社に對しては會

合上のあらゆる便宜を計ります。

□支部並びに支社に於ては社友の社費を纏めて本社に送る事も出来ます。

### 社友の特待

□社友(普通特別とも)五名以上紹介された方にはその勞を謝する爲め若し普通社友なら其の社費を以て特別社友の待遇をし特別社友である場合には半年間の社費を免除します。

□特待を受けた社友には東京で發行する文學書籍(雜誌を除く)講入の場合には定價の一割引で買つて差上げます。

### 川路柳虹著作

□路傍の花(絶版)

□かなたの空

□ヴェルレーヌ詩抄

東雲堂

東雲堂

白 日 社



# 詩歌講義録

(伴奏  
附録)

一冊定價貳拾錢  
郵税二錢  
每冊五十頁體裁瀟洒

「伴奏」附録とし發行する「詩歌講義録」は専ら初心者のため詩の何物たるかを説き併せて詩の作法評釋歴史等に及ぼし回を追ふて微より細に入る覺悟です。詩の何物たるかを會得し詩の本質に觸れんことを乞はる、諸君に取つても有利な書であると共に詩の作法を説く書としてこれ以上完膚なものはないと信じます。本講録は本詩社の社友及び直接購讀者以外には絶対に販賣しないものでありますから其の御積りで御覽下さい。本講義録の執筆者はすべて川路柳虹氏であります。

□詩とは何か(詩歌概論) 詩の種類——詩の形式——詩の本質——西詩綱要

□長詩作法 □短歌作法 □詩歌に要する語彙

□「萬葉」及「古今」 □新詩評釋 □明治詩史

□御申込はすべて爲替にて願ひます。

發行及發行所

東京市小石川區丸山町十七

曙光詩社



